

Life・Culture & Welfare 地域から発信 福祉を文化へ

〒424-0841 静岡市清水区追分 3-5-17
NPO 法人泉の会内 Tel054-367-2878 Fax: 054-367-2884
静岡福祉文化を考える会 代表 平田 厚
編集委員
藤下品子 古屋貴彦 河野恵介 平田 厚

Our Life 151号

- ＊内 容 ＊
- 第2回公開型研修会開催 中学生対象調査結果を踏まえて、ご近所を議論…………… P.1
- 2023年度 静岡県社会福祉協議会ふれあい基金助成事業経過報告 ⑤-1 …………… P.2
- 2023年度 静岡県社会福祉協議会ふれあい基金助成事業経過報告 ⑤-2 …………… P.3
- 「29年目の活動の方向性」「事務局日誌拝見」「編集後記」…………… P.4

2023年度 静岡県社会福祉協議会ふれあい基金助成事業 私にとって “ご近所” とは 中学生の意識と実態調査結果報告 第2回 公開型研修会を開催 大いに、ご近所を語る

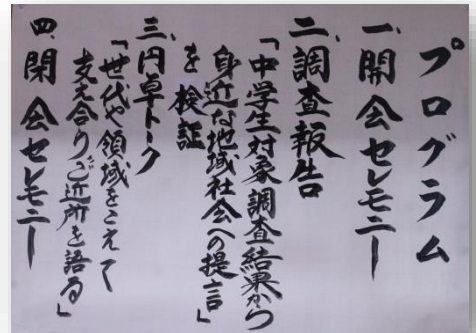
本会は、平成20年代から、今日まで「ご近所福祉ってなに？」の議論を重ね続けてきた。また、結成以来、「調査研究事業」を重視し、これまで27年間にわたり、「大人対象」「子ども対象（小学4年生～6年生）」「高齢者対象」の各領域における「意識と実態調査」に取り組んできた。今年度、初めて、「中学生対象」に「私にとって“ご近所”とは 中学生の意識と実態調査」に取り組んだ。

なかなか、身近な地域社会で、中学生と向き合う機会が少ない今日にあって、長引くコロナ禍下と連日の猛暑も加わり、大変な時期にもかかわらず、県内各地から、尊い中学生の意見が寄せられた。

近い将来において、地域の担い手として、大いに期待したい中学生からの意見をもとに、去る2月17日（土）静岡市清水区追分「寄ってっ亭」において「調査報告研修会」（第2回公開型研修会）を開催した。

(1)「静岡発 福祉文化の創造」28年間を振り返る学習の場 (2) 世代を超えた身近な生活圏域の課題解決に向けた議論（「生活会議」）をする場 (3) 中学生対象の調査の意義を検証する場 (4) これまでとこれからの“ご近所福祉”を語り合いの場 (5) 「ご近所力」で、「共助社会の再構築」を学び合う場等を研修着眼項目に、世代や領域を超えた、つながる“ご近所福祉”を大いに語りあった。

「円卓トーク」では、「全ての住民に、地域を見える化・わかる化する工夫が必要」「いかにして、地域の福祉力をアップするかは課題は大きい」「今の地域社会には実体験の地域環境が少ない。いつでも体験できる環境づくりが求められている」「今の中学生は、意外と地域のことを考えていると感じた。こうした提案に応えるようにしていく仕組みづくりが急務だ」「やはり、地域は楽しいと感じることが出来る努力が必要だ」「基本は、家庭がしっかりしていること。そのためには、子を持つ親への教育が求められる。専門性と市民性を融合していく地域環境をつくる工夫が必要である」「教育とコミュニティを考えていきたい」「子どもは社会の宝物をしっかりと認識していきたい」「地域の情報を常に共有すること」「地域が見えないとつながらない」等意見が交わされた。」



2023年度静岡県社会福祉協議会ふれあい基金助成事業**静岡福祉文化を考える会 調査研究事業 ⑥****私にとって “ご近所” とは 中学生の意識と実態調査****351名の中学生から、大人社会へ15の提言**

2023年度に、静岡県社会福祉協議会ふれあい基金助成事業により取り組んだ「私にとって“ご近所”とは 中学生の意識と実態調査」は、本号第147号から第150号において、「助成事業決定」「共創社会実現研究会設置で円滑に事業展開」「351名の中学生からの回答を基に入力作業・調査協力者からの声」「データ分析-児童との対比/確実に地域社会を捉えている」等、経過報告をしてきた。最終回の今回は、「351名から、大人社会への15の提言」として最終報告する。

- (1) 文化・芸術・スポーツ等、多彩な趣味・特技を持つ中学生が多いことがわかった。
自分の持ち味(趣味・特技)を地域活動の場で活かしてみたい機会があれば、参加したい意向を53%持っている。
中学生の自己表現が出来る身近な地域環境づくりに向けて、地域参加の糸口(きっかけ)をつくる機会を、コミュニティ組織運営において常に心掛けたい。
- (2) いまの生活環境に満足をしている中学生(86%)であり、ホッとする居場所(家庭・自分の部屋)も心得ている。
成長とともに、家庭・家族環境の次に、友人、友人のいる場所の回答が多くみられる。
家族とも楽しく生活している環境だと回答のある中で、悩みごとを8割の中学生は持っている回答(学校の勉強のこと、将来のこと、進学のこと)から、家庭環境においては、日頃から、語れる環境に努めていくことが求められている。
- (3) 大人への成長過程で、抱えている悩みを相談できる相手は、家族から友人へと大きく変化をしている。その中でも、父親の存在が見え隠れしている傾向が伺える。
「語れる環境」づくりは、まずは家庭・家族からを心掛けていきたい。特に、男性の社会性や、コミュニケーション力を養う、日頃の心掛けに努めたい。
- (4) 友人に相談する、友人といる場所が居場所である回答からも、今の中学生は、友人関係は幅が広く、お互いに話せる環境を維持していると受け止められる。こうした「語れる環境」を大人社会は、歩み寄りの中で、中学生が、地域社会を見る目を養うことが出来る工夫が求められる。
- (5) 社会の大きな変化の中で、大人社会は共働きの社会となっている。
こうした、大人社会を取り巻く家庭環境にあって、「家事労働(手伝い)」の位置づけは、小学生と比較すれば減少はしているものの、その役割分担は、十分意識している回答である。
本来、家庭機能として「産み育てる機能」「保護的機能」「福祉的機能」「教育的機能」「経済的機能」「情緒安定機能」の6つの柱立てがあるといわれているが、今後、こうした機能は大きく変化することが予測される中で、家事労働の位置づけは、日常生活の中で、自然に位置づけていき、社会性や連帯性を育む家庭環境を維持したい。
- (6) コミュニティ組織運営の認識や理解は、今日、大人社会における大きな課題にもなっているだけに、地域社会における、身近な地縁組織の所属意識を中学生に求めても、「知らない」回答が大半(73%)である。
日頃から、近隣社会の共助のあり方について、大人社会から、まず、意識を高め、中学生を地域社会につなげる工夫をしていきたい。
- (7) 誰もが、安心して暮らせる地域であると回答した中学生が約7割、まだまだお互いに努力をしていく必要の回答が3割ある。こうした回答を踏まえて、中学生が心掛けていることの一つに、自分から進んであいさつをする回答が約3割ある。
難しい取り組みではない、普段の生活の中で取り組める行動でもある。
他人のために、出来ることはやるという意味表示の回答が約7割あることを踏まえて、大人社会は、中学生に、積極的に地域とつながりが出来るように、その出番を提供していく工夫をしていきたい。



私にとって“ご近所”とは中学生の意識と実態調査報告書
仕様 A4 80P カラー印刷
内容 調査の概要・サンプル構成・調査結果・調査まとめ・本会28年の歩み・本会規約・調査実施要項
若者発 近所福祉かるた紹介コーナー等

- (8) 時間的制約のある中学生は、それでも5割は、地域の行事等に参加をしている回答である。参加していない中学生からは、時間が無い回答は多いものの、参加のきっかけがない、情報が届いていない、参加の仲間がいれば参加すると、自分に合った、楽しい行事を期待する回答に、中学生の地域参加の期待もできる。

地域行事等への参加の動向は、出来る限り参加したい81%の回答結果から、中学生の持ち味が発揮でき、大人社会だけの企画運営から、中学生等、若年層の意見を積極的に取り入れてほしいと要望する意見を組み入れた場合に、地域社会への関心は高まり、それぞれの領域の負担が軽減され、地域の活性化に一歩前進する予測もできる。

こうした提案を実現していく上で、「トータルコーディネート機能」を、誰が担うかの課題がある。

- (9) 住みよい地域であるとの回答が91%あった。大人社会にとっては、大いに救われる回答結果である。福祉視点からは、「ご近所づきあいが良い」の回答も多い。

引き続き、大人社会が、住みよい地域に向けて、大いに努力していく領域でもある。

- (10) 今や、情報の多様化、複雑化等が進んでいる中で、中学生は、身近な地域の情報入手は、「家族」が一番多い回答であった。この意味から、まず、大人社会が、積極的に地域に関わり、地域の動きを知り、常に地域の情報を細かく、わかりやすく、中学生に、日頃の家庭生活の中で話す環境をつくること求められる。

I T時代の中で、意外と、中学生は、小学生よりも「回覧板」からの情報入手を心得ている。身近な地域社会では、これまで長い間、今日まで、回覧板の機能を維持している。

回覧板の必要性の有無が今日、コミュニティ組織の中で議論されている中で、改めて、いかにして、継続的に有効活用できるかの課題は大きい。

- (11) 中学生は、地域に貢献したい思いを持っている。

この思いは、女性は男性よりも積極的な面が伺える。

男性も、積極的に、地域の課題を理解する努力をしながらも、大人社会は、常に、地域の現状を中学生に「見える化」「わかる化」し、共通理解に努めたい。

- (12) 身近な地域社会の中で、ほとんどの中学生は、日常的なふれあい交流や実体験の機会をしていない回答が85%あった。

しかし、体験があったと回答した中学生15%の内容は、「身内福祉:家族に障害者がいる、親戚の障害者の方と交流」「ご近所福祉:地区のふれあいサロンで地域の高齢者と交流した、ご近所の付き合いを心掛けている」の範囲内の自然的な内容を回答している。

まだまだ「福祉」を構えた受け止め方で、難しいと感じる地域環境でもあるようにも伺える。こうした面から、一人一人が意識改革し、誰もが、関われる福祉観を働きかけていく地域づくりを心掛けたい。

- (13) 中学生から、身近な地域社会で誰もが安心していく上で、必要な支援やサービスの回答は、「見守り・声掛け(安否確認)」「災害時の手伝い」「簡単な介助・介護」「買い物支援」「話し相手」「移動支援」「ゴミ出し」「定期的なふれあいサロン」「子育て支援」「掃除(草取り)」「趣味・特技の援助」「配食」「調理」等、大人社会に求めた回答とほぼ同じ内容の回答であった。

また、地域参加活動のイメージは、「思いやりのあるもの」「まちづくり」「社会にとって必要」「自ら進んで行う」前向きな回答結果で、地域の現状をしっかりと受け止め、支え合う社会を望んでいることが伺える。

- (14) 福祉活動として長い歴史をもつ「赤い羽根共同募金」の理解は、成長過程で、小学生の理解度よりも高い94%の回答であった。直接関わっている「学校募金」をはじめ、地域における「戸別募金」「職域募金」等の意義を、更に理解することを期待したい。

- (15) 「ともに、助け合う地域づくりへの提言」(自由意見)では、中学生から、319件の意見をいただいた。この具体的な意見から、「大人社会に向けた提言」として、取りまとめると、

- ①若者にもわかる、地域活動の動きを知りたい。(地域活動の「見える化」「わかる化」)
- ②若者の意見を地域活動に活かせる機会を考えてほしい。(誰もが参画する地域づくり)
- ③若者も気軽に、地域の行事に参加出来る呼び掛けを期待したい。(気軽に参加できる環境)
- ④それぞれの地域の良さをPRしていくことで、住民が地域に関心をもつ。(地域環境)
- ⑤地域情報に、容易にアクセスできる情報提供の工夫(広報啓発の開拓)

本会は、2024年度は、いよいよ、29年目の福祉文化実践活動に さらに、「ご近所福祉こそ福祉文化」を検証

2024年度は、29年目の福祉文化実践活動に入る。節目である30周年まであとわずか。

今こそ、「福祉文化の推進」が求められる時期であることを認識し、2020年(令和2年)以降今日まで、「ご近所福祉検証期」として取り組んでいる展開を継続し、**2024年度の活動テーマを「見える・わかる“ご近所福祉”こそ福祉文化**」として、住民主体のご近所のささえあいを学び合う取り組みとしたい。

本会では、既に「ブログ」を立ち上げ、その都度情報を発信しているので、「QRコード」で、本会の活動の状況を確認をお願いしたい。「2024年度委員会」及び「2024年度公開型研修会」の開催の予定は下記の通り。

(1)「2024年度委員会(学習会)」の開催日時と会場

- ・第221回委員会 5月25日(土) 10:30 静岡市清水区追分 「寄ってっ亭」
- ・第222回委員会 11月30日(土) 10:30 静岡市清水区追分 「寄ってっ亭」
- ・第223回委員会 2月22日(土) 10:30 静岡市清水区追分 「寄ってっ亭」
- ・第224回委員会 3月29日(土) 13:30 静岡市清水区追分 「寄ってっ亭」

(2)「2024年度各種研修会」の開催日時と会場

- ・第23回福祉文化研究セミナー 11月30日(土) 13:30 静岡市清水区追分 「寄ってっ亭」
- ・「第2回公開型研修会」 2月22日(土) 13:30 静岡市清水区追分 「寄ってっ亭」

2024年度 静岡福祉文化を考える会 第1回 公開型研修会のご案内 「ご近所福祉」これまでとこれからを語る

「静岡福祉文化を考える会」のこれまでの調査から浮かび上がった「ご近所福祉」

●着眼項目

- (1) 世代を超えた身近な生活圏域の課題解決に向けた議論(「生活会議」)をする場
- (2) 「静岡発 福祉文化の創造」28年間の歩みから、地域課題を検証する場
- (3) わたしのご近所を検証する場
- (4) ご近所福祉のこれまでとこれからを語り合う場
- (5) 誰が“ご近所福祉”を創るかを語り合う場

●開催日時 令和6年 5月25日(土) 13:30~15:30

●開催会場 静岡市清水区追分 「寄ってっ亭」

●プログラム ① 基調報告「これまでの意識と実態調査」から、ご近所を検証する
② ワークショップ「若者発 ご近所福祉かるた」で、私の地域を検証

●福祉文化実践活動をご一緒にしませんか。

「静岡福祉文化を考える会」は、阪神淡路大震災(1995)翌年の平成8年9月1日に発足し、2023年度は、28年目の福祉文化実践活動を展開中である。長引く、厳しいコロナ禍下だからこそ、「福祉文化」を問いつつ、さらに「静岡発 福祉文化の創造」に、関係機関・団体等との協働で、身近な福祉問題を広く公開型で学び合っている。

特に、2020年度(令和2年)以降は、「福祉文化とご近所福祉」基に、活動を具体化している。

本会の活動基調は、「専門性と市民性の融合」「公開型地域総合学習の企画と実践」「課題解決に向けたプロセス重視」のもと、さまざまな分野で活動している会員が、地域社会全般の課題解決に向けて、市民の視点で活動をしている。ご一緒に「福祉文化」を議論しませんか。

◆ブログで活動を発信中。関心のある方は、お問い合わせ下さい。

■会費：社会人3,000円 大学生以下1,000円

■問い合わせ：420-0841 静岡市清水区追分3-5-17

NPO 法人泉の会内 静岡福祉文化を考える会事務局

Tel054-367-2878 Fax: 054-367-2884

長引くコロナ禍に加えて、猛暑続きの2023年度も、静岡県社会福祉協議会ふれあい基金財団助成事業により、本会の主要な活動の一つである「調査研究事業」は、この28年間では、初めて中学生を対象に「私にとって“ご近所”とは 中学生の意識と実態調査」に、多くの方々のご支援をいただきなんとか、計画に基づき取り組むことが出来た。

同じ調査内容で、本会協働団体「焼津福祉文化共創研究会」が、活動管内の2つの中学校の全面的な協力により全生徒の81%が調査に応じしてくれた。教育とコミュニティの協働を改めて学ぶ機会にもなった。これまでの調査研究事業から浮かび上がった数々の提言を今後は、改めて整理をして、地域社会に問題提起をしていく課題がある。



焼津福祉文化共創研究会
焼津福祉共創QRコード



静岡福祉文化を考える会
考える会QRコード